傘寿を前に繰り言

後期高齢者になったら内科医と整形外科医をホームドクターに

苅谷　泰弘

☆無知と頑固は命取り

二〇十二年十月末のテニスの試合中に転倒して受けた膝と腰・肩の痛みが年を越しても治らず、よりひどくなって少しの時間ワープロに向かうこともできなくなった。右足の膝や大腿部の筋肉痛も激しくなり我慢の限界を越したので、かかりつけの医院へ血圧の薬を貰うついでに膝と腰の痛みの相談をした。

医師いわく、『痛み止めに効く湿布をこれまでに何度も出しているのに、原因究明の診断を受けて来なかったからこの様なことになったんですヨ！、整形外科を紹介しますからチャンとした診断を受けてください！』、と半ば呆れ顔で真顔で言われた。　私には古くから脊椎滑り症があるので、整形外科へ行くとやれ手術だと

か入院治療などと言われるのが厭で今まで行かずじまいだったので、今回も同じ様に断ろうとしたが、先生は『その痛みの原因が単に打撲であればよいのですが、ほかに原因があるとも考えられますので、思い切って一度専門医の診察を受けて来て下さい』、と諭された。四月に入って湿布薬を貰いに行くと、家から歩いて三分の距離の日赤福井病院への紹介状を渡されて受診することになった。

紹介状を持って予約日の五月二十八日十時二十分に日赤の整形外科外来の受付に行き、手続きをしてベンチで待つこと三時間三十分。診察室前への案内番号が出て移動。五分程で診察室へ呼ばれて、初めて医師と対面して問診を受ける。五分程で足・腰・背骨のレントゲン写真を撮ってきて下さいと指示されてX―線科へ。撮影は四～五分で終わり、再び整形外科の受付に終わった旨報告して待つ。十五時三十分に診察室へ呼ばれて、写真を見ながらの説明を受ける。

『見事なものですねぇ！ 膝から下の骨は湾曲していますネ。これは膝のお皿の軟骨が擦り減っているのに無理してそのまま使ってきた証拠です。もう限界にきていることを示しています。これだったら痛みも出て来るのが当たり前。ここは人工関節にした方が良いですネェ。どうします？ 手術は簡単ですヨ！』と、いとも簡単。『手術は厭です、止めておきます』と断ると、医師は『じゃあヒアルロン

酸でも入れますか？ 気休めみたいなものですが…』と。『それから背骨ですが、お年寄りの特徴で曲がっていて、腰椎には滑りがあり椎間板も擦り減っています。この間隔が狭くなっています。骨にはこのように棘が出ている、これが年寄りの特徴です』と、映像を指しながら飾り気なく言う。『この所の隙間が狭くなっているから椎間狭窄症なのです。腰の痛みや足の痛みが出ているでしょう。この痛みはブロック注射で和らげることは出来ますから、今すぐにでもしましょうか？』と。恐れていた神経ブロック注射が出て来た。

これは近所のゴルフ仲間が、一昨年夏に市内の整形外科病院に二ケ月入院してこの治療を受けたのを見舞っていたので、即座に『イヤ結構です』と断った。医師は怪訝そうに『そうですか』と言って強要することはなかった。

何故断ったかと言うと、今の私は独り身で生活していて、畑の世話や庭木の枝切り、庭の雑草引き、仏壇の世話など多くの仕事があるので、注射の為に入院して家を空けることは出来ないと判断して即座に断ったのだった。

『じゃあ二週間後の火曜日の十三時三十分までに受付に来て、ＭＲＩの撮影をして来て下さい。詳しい処置や相談はそれからにしましょう』、で医師の診断は終わった。次の予約表を受け取って十六時二十分に会計を済ませて帰宅。

トイレに行かず食事もせずの一日は終わった。ただただ『忍』の一字。収穫は整形外科の患者の多さを知った事。自分を含めて老人の多さ、歩行困難の人、介助を必要とする人の多さに驚いた。

四日後に紹介してくれた医師に受診の報告に行って目を覚まされた。すでに日赤の担当医から報告が来ていて、総て了解ずみ。『紹介してあげた先生は、日赤でも評判の高い最も忙しい先生です。その先生がすぐに注射をしてあげると言っているのにそれを断って帰るとは何事ですか？』と。小生は『私はその神経ブロック注射は入院して受けるものと合点していましたので、家のこともあるしすぐには入院出来ないと咄嗟に判断して断ったのです』と弁解した。落ち着いて考えれば分かることだが、馴れないこと故、慌てて混乱して正しい判断が出来なかった。

二週間後、ＭＲＩの撮影を済ませて三十分程受付で待ち、診察室に呼ばれた。医師に先日の注射拒絶の非礼を詫びた後、ヒアルロン酸と神経ブロックの注射を改めてお願いした。ＭＲＩのキレイな画像を見ながら医師は『もはやこの状態では元の様には治りませんが、少しでも痛みを和らげて楽に動ける様にはなるでし

ょう』と言い、『じゃあ隣の部屋で注射をしましょう』と言って処置室への移動を促した。開業医では入院して注射をするのに日赤ではすぐに帰宅させるのかと少々不安があった。処置室で看護師に言われるままに注射の準備をして待った。注射は医師が膝にヒアルロン酸をして次に俯きにされてお尻にブロック注射をした。恐れていた神経ブロックの注射は薬剤が入るや下腹部が熱くなる感じがして思わず『ウッ！』と唸った。看護師がそのまま二十～三十分安静にしていて下さい、とタイマーを仕掛けて出て行った。タイマーが鳴って、『もう良いですヨ！』と看護師に起こされて身支度をする時には、体にフラツキを感じたが、病院からは自転車に乗って帰宅することが出来た。当日の入浴はだめ。翌朝、不思議なほどに腰痛がなく、膝の具合も良いように感じた。

その翌日にはテニス仲間が来て一試合に付き合い、その翌日には近所の仲間とゴルフに行けた。しかし、さすがに歩き疲れてハーフで打ち切った。

二週間後、二度目の注射を受けに行き、医師に注射の効き目を報告した所、ステロイドだから続けては使えないのですと言って、注射の準備を看護師に指示した。薬の正体を聞かされて驚いたが、副作用が出なければ幸いと思い二度目の注射を受けた。続いて二週間後の三度目の注射は、医師が状態を聴いた後、今日は

ブロック注射は休んでヒアルロン酸の注射のみとなった。過剰な薬剤を使用しなくなった医療を見た感じで、安心した。
後日、掛かり付けの先生は、『苅谷さんの様に少々の痛みや辛さを我慢して医者や薬を嫌うのを痩せ我慢と言いませんか？ 痩せ我慢はやめて、お年なんだから素直に人の言うことを聞いて指示に従って下さい』。『後期高齢者になったら、内科医と整形外科医をホームドクターに』と、やんわりとたしなめられた。反省！

☆☆悔悟と人生再出発…脚下照顧…

足下を照らすと自分が見えるというか、自分の歩む道がはっきりと分かると言われる。足下さえ明るければ、闇夜でも転がることはない。人生で脚下を照らして己を顧みることが出来れば、素晴らしい人間になれるだろう。だが、それが出来る人は少ない様である。懺悔と反省を繰り返しながら自分の進む道の方向性は正しく維持出来るだろう。前者は悔い改める、反省は顧みる・振り返るで、前者よりも少しは軽い感じはするが、ともに自分を糺そうとする気持ち（意志）の表れているものと思う。

停年を迎えた翌年の三月、自分の足跡（行い）の掃除を兼ねて、四国八十八ヶ

所と高野山の巡礼に出た。心底には信心の観念も多少あったと思う…。
ＪＲ四国のジパングクラブの企画で、ジャンボタクシーで巡る十一泊十二日のコースを選んで参加した。高松のホテルに集合して、予定人員八人のところに女性二人、男性五人の七人で出発。二日目朝、高松のホテルを出発して鳴門の一番札所、霊山寺まで直行。車中で一通りの作法の説明をドライバーから受け、車中のビデオを見ながら予習をしたが、観光気分の男二人は馬の耳に念仏よろしく聞き流し、一人は俳句の旅を吹聴する新潟出身の元小学校校長、句作を自慢。
最近ＴＶ放送されている徳光和夫アナの遍路旅と重複する姿。女性二人は装束もキチンとしたお遍路さん。残る二人の男、私と福岡出身者は共に親を亡くした者同士で供養を兼ねたものだから一応身なりも装束を整えていて、都合四人は遍路の姿。俳人と観光客は普通人のいでたち。とにかくおかしな巡礼であった。

装束とは、言わばユニホーム。一応正式の衣服だから参拝には理に適っていて不都合な点はない。だがそれ以外の服装では許せない行為があれば必ず叱責を受ける。　菅笠は合格だが帽子ではダメ。山門をくぐる時は菅笠は取らずに入れるが、帽子は脱ぐ。金剛杖はステッキではないので、ステッキはどこでついても宜しいが、金剛杖は橋の上でついては駄目。等々、色々な決まりがある。

幸い相棒となった福岡からの方と自分はお経を暗唱できたし、参拝の作法も一応知っていたので最初の寺から先達役の運転手に手間をかけずにスムースに巡拝ができる様にと一行の歩を進められた。

手洗い、口濯ぎ、打鐘と参拝の基本は適宜説明し、線香・蝋燭の備え方、基本動作をその都度注意しつつ、他の巡礼者に恥じないよう、迷惑にならない様に巡拝を進めた。

納経所での押印はドライバーが一手に引き受けて、我々のお参り（読経）中に済ませてくれたので、他の大勢のお遍路さんを避けて手際よくお参り出来た。

二日目の予定を終えて宿泊所へ入り、相棒と初めて同室の夜となった。気疲れでグッスリ眠って翌朝からは読経のマラソンであった。お経をスムースに読めるために車中での雑談を止めてお経を声を出して練習したが、観光客と校長は無視したので、なかなか唱和できなかった。

ドライバーは観光にも気を配り、名所の説明にはぬかりなかった。

三日目の晩は室戸岬の手前の二十三番薬王寺近くのホテル。歩いた距離は少なくても、曲がりくねった山道のドライブでは体が異常に着かれる強行軍であり、夜はグッスリ休んだ。

四日目朝、阿波最後の薬王寺を済ませて室戸岬の山上に建つ最御崎寺からは土佐の札所。景色もガラリと変わり、私にとっては懐かしい故郷、南国土佐の風を胸一杯吸い込んでお参りを始めた。お寺を降りて室戸岬の近くの食堂で潮風に吹かれながら昼食を済ませて、安田、手結、野市、佐古を経て大津の国分寺まで来た時にはもう午後三時を過ぎていた。
少しの休憩を取って一宮の善楽寺のお参りを済ませたのが四時半過ぎ。南に五台山を見ながらお城近くの電車通りのホテルに入る。早い夕食を済ませて観光客の為にお城を案内。たまたま花見の真っ最中、桜の下での宴会を見せてやった。女性グループの箸拳の賑やかさには驚いていた。

五日目は竹林寺から足摺岬までの最長区間。この日ぐらいから四人（女性二人と私と相棒）のお経は上手く合う様になって来た。足摺岬の金剛福寺の納経を済ませて、暮れかかりの岬見物、椿の林を見て民宿へ。民宿の夕食は超豪華。何にも文句の出ようがなかった。
六日目、岬を発って土佐清水港から弘法大師の見残したと言われる龍串・見残しを観光して土佐路最後の延光寺を済ませて伊予路へ入り、宇和島から松山までの長距離に挑む。途中で大豪族の衛門三郎と弘法大師との四国遍路の始まりの因

縁話や、西林寺の近くの杖ヶ淵公園では、大師の起こした奇跡の清水を湧き出させた浄水公園などを見ながら北上して、夕日の傾く道後温泉街の旅館・椿館別館にたどり着いた。遍路が橋の上で杖をついてはいけない理由となった“十夜ヶ橋の言われ”も見たので、後日の為にはなった。

道後温泉の内湯には入らず、坊ちゃんでおなじみの道後温泉そのものに入りに行くこともできた。巡礼の後半、明日からは心新たに巡る事になるので、伊予の食材に皆、舌鼓を打っておとなしく就寝。

七日目、松山市内の石手寺から北東へと歩を進めて今治市内近郊のお寺に参拝して、しまなみ海道の吊り橋をみて今日の宿、湯の浦温泉郷に入る。宿の温泉風呂で汗を流す。

八日目、四国の霊峰石鎚山に近い横峰寺から伊予西条・新居浜と距離はあるが、お参りするお寺の数は少なかった。車の移動時間が多くなり、車中での居眠りの頻度も増えてきた。新居浜のリーガロイヤルホテルに宿泊。近くのコンビニで飴玉と少々のアルコールを購入補充して翌日に備える。

九日目はいよいよ伊予の国を離れて讃岐路に入る。この巡礼で使う三ヶ所のロ

ープウエイの二番目を使って、阿波・讃岐・伊予の三ヶ国にまたがる最高所の雲辺寺に参拝。ロープウエイの駅周辺の風は下界よりもかなり涼しい。

観音寺の砂の一文銭をみて最後の難所と言われる弘法大師が幼少時に学んだ弥谷寺から出釈迦寺を経て大師生誕の地善通寺で一日を終え、宿泊は琴平温泉。

十日目は早起きして琴比羅神社を参拝。高い石段を上り、讃岐平野を眺めてから下山。旅館での早めの朝食を済ませて四国最後の巡拝に入った。今日の最初は七十六番金倉寺で、日露戦争で名の知れた乃木大将が善通寺師団長時代に下宿していた所だ。そこをスタートしてこの巡礼の最終過程、源平の合戦の古戦場屋島へ車を進める。天皇寺の悲恋物語や根香寺の怪獣退治、また大師が中国へ渡る際に土地の人に八個の栗を渡して飢饉に備えるべく栽培せよと渡した八栗寺の逸話などを聞く。

本日最後のお参りは、土用鰻の逸話で有名な平賀源内の生家近くの志度寺。明日に二ヶ寺を残して四国最後の泊り宿”喜代美山荘　花樹海”へと西日に向かって車を走らせた。高松市内はかなりの混雑で、予定を過ぎて宿に到着。宿は思い切りデラックス（外見）。テレビドラマのロケによく使われている垢抜けしたホテル並みの旅館である。館内には若き日の弘法大師像が祭られている。山腹に建って

いてフロントは確か六階。我々遍路の部屋は最下層の一階。北に向かった部屋で瀬戸大橋が見える景観である。風呂は最上の九階。そこの朝風呂の景観は天気さえ良ければ屋島の先端から昇る朝日が壮観。
いよいよ明日は高野山参りで全行程を終えるので、全員ホテルの売店で銘々土産の購入・発送と慌ただしかった。

朝食を済ませて十一日目朝はいつもより早い七時半に出発。市内の八十七番長尾寺を終えて徳島県境の最終八十八番大窪寺へ急ぐ。大窪寺で八十八ヶ所巡礼の修了証書？を購入して、高野山を目指した。
鳴門大橋は渦潮の上を通り、淡路島有料道路を経て、明石海峡大橋を前にして昼食。海峡を渡れば混雑する都会の高速道路。神戸・大阪・堺と沿岸の道路を突っ走って関西空港道から別れて東南方向を目指し紀ノ川を渡り葛城の山間部へ曲がり曲がりの山道を約二時間走って、陽の沈む前に大門前にたどり着いた。
お経に無関心だった二人、俳句作りを自慢して肩肘張っていた元校長も少しは何かを感じ取ったものと見えて、口数は少なく（疲れたせいか）なった。他の四人は満ち足りた顔であった。
大門前で一旦下車して一礼して山内に入った。山全体がお寺である。慣れたド

ライバーが最後の宿泊所、持明院の宿坊に車を付けてくれた。宿坊には多くの部屋があり門の正面が本堂で、宿坊とは渡り廊下で隔てられている。当番のお坊さんに部屋に案内されて、入浴・夕食・それぞれの供養の有無を聞かれ、明朝のお勤めについてなどの説明を受けて旅装を解いた。

ア～シンド！が本音ではあったが、全身から疲れも何もすっ飛んだ気分。夕食は言うまでもなく精進料理。お坊さんがビールですかお酒ですかと聞いてくれた。銘々酒とビールを頼み精進料理で精進落としをした。緊張しながらもゆったりした気持ちで食事を終えて就寝。辺りは静か。都会の喧騒はなく、超静かな山寺の夜の別世界を満喫した。

朝の勤行は六時からで、四十分程で終わった。正座の出来ない人用に椅子も用意されていて楽にお勤めが終えられた。食事を終えて宿坊を出て、金剛峰寺から奥の院までのお参り。参道脇の杉の大木。全国の諸大名の墓所等々を巡って奥の院の弘法大師のお墓を参拝してこの旅は終わった。信仰心がなければ、この旅は出来なかろう。素直にお大師様に感謝。午前十時過ぎには山内での買い物を済ませて大門で一旦下車して深々とお別れの一礼をして一路新大阪を目指した。

高松を出発して始まった巡礼の間、毎日の昼食は、阿波・伊予・讃岐では皆がウドン。手早く食べ終えてすぐに発てるし、しかも安い。土佐ではウドンを避けて、室戸では刺身定食、須崎ではタタキ定食を薦めた。何故なら土佐にはウドンの習慣がないからである。

初日（実質）は二日目の阿波路では巡礼の仕草も品位もなかった様に見えたが、土佐路に入ると慣れて落ち着き、伊予路ではかなりお遍路さんらしくなって良い雰囲気になった。讃岐ではもう一人前のお遍路さんになった様だった。

毎日長時間緊張しっぱなしのドライバーの安全運転で、十日間病人も出ず、事故にも遭わず巡礼できたことにお大師さんとドライバーに感謝して新大阪駅で解散した。

新大阪から二時間と少しで家に帰り着き、荷物を置き傘をとり、お大師さんの身代わりの金剛杖を洗い清めた後に家に上がった。金剛杖を床の間にたてて家内に十一日の経過を簡単に話した。

前後するが、玄関を入った時にはもう再度の巡礼に出たくなっていたので、その旨を家内に話すと、『行けば良いではないですか』との返事。これが、かねがね聞いている“四国病”だナと思った。一度巡るとすぐにまた四国巡りをしたくな

るとのことである。初日からの観光気分の二人組と俳句の先生には不愉快な思いをしていて、いつ爆発するかと内心不安であったが、爆発せずに良かったと思う。別に無理して我慢した訳ではないが、多少辛抱、我慢と仏様に言い聞かされていたのかも知れない。無意識の修行だったのかも……。

☆☆☆四国病の発病

二度目の四国遍路　最初の遍路から帰って、その年の十月下旬に二度目の巡礼に出た。最初の遍路から帰ってすぐに巡礼に出たくなり、何だか落ち着かず思い切って出発した。夏の名残の暑さの残る時期であり、日中は暑く感じられたが、昼間の時間が大分短くなって、朝の風は涼しくて快適。

前回の旅から六ヶ月、歩く道路の感触が微妙に違って新鮮な気持ちでスタートした。同行の仲間は五人。栃木県から来た一歳年上の男性、山形県から来た、かなり年長の会社経営者の男性と東京から来た夫婦。山形からの人は巡礼に馴れた人。栃木の人は公務員を定年になった人で初めて。ご夫婦は共に再婚者で、それぞれの親の供養に来た初めての巡礼者。　宿は男女別々だから夜は奥さんは個室。男性は『いびき』の都合で毎日交替で相手を変えての相部屋。おもしろい企画で

ある。宿泊所は前回と同じホテルと旅館。私の今回の目的は自分の両親と家内の両親の供養をと目的を決めてのものだ。

秋の遍路路は春とは趣が全く違う。新緑と紅葉とでは陽と陰の違いがあるナと感じながらの旅だ。参加者全員が言わば祈りの旅だから、気楽な気持ちでご本尊に祈り、心の中で身内の仏を拝むので、一行は遠慮気兼ねなく素直な気持ちでお経を唱え一体感のある一蓮托生の言葉通りの旅であった。

車中の席替えは同じ姿勢でいる辛さを解消するために、午前と午後の二回。良い雰囲気で十日間の高野山参拝まで無事に終わった。

四国八十八ヶ所の遍路には言い表せない不思議な魅力を感じさせられる。それぞれのお寺の参拝者は時季の良さもあって、境内は朝早くから混雑しているにも拘わらず銘々が唱える読経が互いに邪魔にはならずに、むしろ和合して落ち着いた雰囲気を醸し、安堵の境地にいる心地であった。これが修行かナ。

この二度目以降、今日までに亡妻の供養も含めてこの巡礼を十四回繰り返したが、その都度新たな気持ちと心の落ち着きを得ている。この四国八十八ヶ所巡礼には「終わり」という言葉はないように思う。

☆☆☆☆悟りを開いた和尚さん

寺参りをして読経をし、写経をすることや黙座を行うこと、滝に打たれたり山野を行脚することなどの行動を修行というようである。

先日何気なく目にしたテレビ番組の古寺「百」景で、京都の臨済宗妙心寺の偉いお坊さんが、『さとる（悟）とは何か？』と言うと、それは『差をとることである』と説明された。それに続く一連のお話を伺っていて、それが『何から』『何を（どのような差）』を取るのかという説明がないまま、次の話題へと進まれたので何となく釈然としなかった。

この様な話が禅宗の問答かなと思ってそのままにしておこうかなと思ったりもしたが、これで説明出来ているとでも思っているのかナと妙な気持ちになった。続く画面では建仁寺や相国寺、龍安寺など京都の禅寺五山の建物や庭園が次々と紹介されて、問答の答えの糸口になる話は全く出ては来なかった。

そこでこのもやもやした正体不明の『差をとる』と言う言葉に、しつこく迫ってみようと思う様になった。

どこにどのような形で存在する『差』なのか？ また何と何の間にある『差』なのかを、明瞭にしなければ答にはならないと考えを巡らせた。禅僧の話は俗人に

は分かりにくいのが当たり前かなと一時は良い加減に納得しかけたが、それでは済まんぞ、と開き直って考え始めた。今までの自分なら、禅坊主の問答は分からないものと始めから決め込んで放り投げたところだが、この度だけは何故か放り投げるどころか、何かに吸い寄せられる様にいやにこだわり始めた。

何か事ある毎に説教の一つも言って叱ってくれていた親は既に無く、頭に来て暴走し始めた時には心底諌めてくれた妻も亡くなった今、日々の食事を作り仏壇に供え一日を読経で始めて夕方の読経で終わる日々を過ごしている現状に馴れて、沈滞して生きているだけでは物足りなさを感じて何か生産的なこと、前向きに進んで行く事をしなければと思っていたこの時に、丁度この『悟り』の問題が出て来たので、これを絶好の暇潰しと自己活性化の為にしようと食らいついて深く考える自己『問答』を始めた。

『悟』―『差を取る』の意味を、ただ字面だけで見れば、そこにあると思われる隔たりは、あると思わなければ何もないということである。先ず『差の認識』から始めるべきであろう。較差をなくすると平等（たいら）になる。『差がなくなる、同じになる』という事だし、較差は質・量・数（形）がなければ比較はでき

ない。算数的に考えれば、実態のないものから実態のないものを差し引く事は出来ないから元々ゼロで、何の意味もない。この『差』なるものは算数的なものではないと考えるべきである。

そこで、「A」と「B」の二つの対象物を「仏」と「己」として考えてみた。すると、両者間には非常に大きな『差』があることが分かる。その『差』は較べる尺度のないほどの大きな『差』であることが分かった。この『差』を取ることが出来れば、「自分」は「仏」になることが出来るだろう。だが、いくら修行を積み、徳を積んだとしても「自分」は「仏」になれない。それは不可能な事だ。何故なら修行というものには十分だという限度がなく、満足するに足る限度も示されてはいないからである。

「仏」は総てにおいて完成されたものとして存在するから、永遠の目標とされるものであって、ある意味では抽象的な存在であるかも知れないが、人間を模した姿形をして具現化されて存在し目視する事も出来るが、その「仏」に「生身の人間」がどのように努力してみても『違い』のないもの『同じもの』になる事は永遠に出来ないという事が分かった。

『差を取り去る』ことが不可能だとしても、限りなくその『差』を縮めて『仏』

に近付くことは、修行に徹することによって近付ける事はあるかも知れないとは考えられる。だが、悲しいかな生きている限り永遠に『悟』の境地には達することはできっこないだろう。即ち、生きた『仏』になることは出来ないと言うことに気付いた。このように何日間かに亙って同じことを繰り返し考え続けたが、結論は同じだった。

今の今まで真に『悟』を開いた人、『悟』の境地にたどり着けた人は生きてはいないのである。（その人に会った人もいない。）

結論として、人も『悟る』ことは出来るかも知れないが、生きている限り『悟れないのだ』と言うことだ。即ち、『悟り』の域に達した瞬間に『仏』になっているということが現実であるということだ。

出羽三山の一つ、月山の即身成仏が即ち『悟った人』ではないかと思う。十穀を絶ち、木の皮や草の根などを食べて命をつなぎ、努力を重ねて自然（この場合は神仏）との『差』を取る修行をして、総てをなし終えて自然になりきったその瞬間に『悟り』の境地を開くのであろう。そうだとすれば、人間は『生きている限り永遠に悟れない』のであろう。それで良いじゃないのか。つまらんことを長い時間かけて考えたものだ……。俺は余程暇を持て余していたのかなァ。

いや余裕ができたのだと思う。自分なりに考える事が出来たと喜ぶべきであろう。無駄な事に時間を費やして考えるということも時には心の栄養素になるのではないかと思う。無駄なことを無駄と思わない様にすることも大事なことだと考える様になった。

私の親しく師匠として十数年付き合ってくれた曹洞宗大本山永平寺の元典座職、『佐藤一彰』和尚は永平寺での六年間の典座職を勤めて後、山形の自坊に帰られて巷の『食』の乱れを糺し、食の持つ正しい教えを活発に広めて来られたが、昨年九月に惜しくも亡くなられたとの知らせを昨年暮れに受けた。その和尚の奥様から先月電話があり、色々と老師の逸話を懐かしんだ後、奥様が、『和尚さんの死に顔を見て、その穏やかさが今まで見たこともない良いものだったことが、私にとって一番有り難かったのです』と言われた。その言葉が印象的である。

和尚は豪快な反面繊細、仕事（修行）上では非常に厳格な人ではあったが、別の一面では常識人でインテリ坊主であった。その『死顔が素晴らしかった』と聞いた瞬間、私は和尚はまさに死の瞬間に『悟られたのだナ！』と感じた。和尚は私に『答』を渡してくれたように思った。

その答は『人間はどこまでも人間、仏ではない』ということで、何の苦労をし

なくても『死ねば仏になるということだ』、とニヤリと笑っている顔を思い出している。和尚は長年修行して、その最後の瞬間に『ようやくその行を終えられたぞ』と思って旅立ったのだと思う。　『悟』を求めて修行し、無心のうちに死ぬことが『真』の修行だと、私には思えるようになった。

妙心寺の放送の一週間後に滋賀県大津市の三井寺の放送があった。三井寺は『役の行者』によって始められた山岳信仰の原典的な修行の形態であることが解説された。いわゆる山伏の行である。山伏は修験者として、柴橙護摩を焚いてその周りを読経しながら歩き無我の境地に到るという。その一連の行動が大峰山や熊野の山々を無心に行動しながら、野や山に在られる神や仏（自然）と一体化しようとする行である。

その極致が『人』と『自然』と『神仏』の間にある『差を取ること』、即ち『一体化すること』、『悟』につながるものだと知った。人が『神や仏（自然）』と一体となれるにはどうすれば良いか。滝に打たれて山野に伏し、無心に行脚して得られる境地とは一体何だろう……？　そこで無心になれて『悟』ることができる。即ち『死』ぬということで『仏』になるのではないか。

『悟り』は永遠のものであり、人間には永遠に生きられる力（能力）はないので、『悟』と『死』とは同一線上にあると言える。『悟る』とは『死ぬこと』であると結論する。

◆余談

日本国は永遠に敗戦国なのか

日本国憲法第九条は日本にとっても世界にとっても不幸な代物でしかない。

羹（あつもの）に懲りて膾（なます）を吹くのたとえよろしく、大東亜戦争に原子爆弾という国際法上違法と言われる武器を使われて負けたからと言って、何も自分の国を武力で護る軍隊をもたずに、戦争は一切しませんと戦争の放棄をした我が国は、平和国家なのだろうか？ だからと言って外国から攻めて来られない保証はないし、武力の無い国家が外国から攻められないという保証はない。

原子爆弾を投下したアメリカは日本を占領して裸にして、将来に禍根を残さない様にと平和憲法なるものを押し付けたとしか思えない。

日清・日露・日支事変以降大東亜戦争に至るまでの日本の武力（戦力・戦闘能

力等々）に恐怖心を持ったから、何としても日本から軍隊を無くさなけりゃとでも思ったからであろう。

そのお陰で、民主的で平和国家日本が生まれて、軍備を持たない手軽さのお陰で、驚異的に高度の経済成長をして裕福になった。経済的に発展したお陰で国民は平和ぼけを起こしてきた様である。

支那（中国）や朝鮮（韓国）へ日本の工業資産（織機）を無償で援助したものだから、日本の繊維産業が傾き斜陽化した自治体（福井県など）も出て来た。

色々な有償・無償の援助をして来たにもかかわらず、最近では歴史問題（植民地政策）や戦時下での行為に言い掛かりを付けては賠償、賠償とお金を無心されるばかりか、領土まで侵犯される様になってきた。

大東亜戦争は日本が仕掛けた悪いものだったというのが奴らの主張の根本にあり、戦争と言う言葉を振り回せば日本は何も言えなくなるとでも思っているようである。

恐喝されて奪われた経済援助金のお陰で奴らは経済的に裕福になり、軍事大国にまでなって来た。

戦後六十八年、そろそろ太平の夢（アメリカにおんぶにだっこ）から覚めても良いころではないか？ イヤ覚めるべきである。

沖縄をいつまでも人質にしておくのか？

本当に本土並みにしようとするならば、アメリカに堂々と対等に話をつけるだけの日本にしなければならんのだ。

韓国は何かに付けて日本に言い掛かりを付ける。既に政治的に解決済みの従軍慰安婦問題でもお金をもっと分捕ろうとして裁判を起こしたりしている。振り返ってみれば、朝鮮動乱の直後には、李承晩ラインなる国境線を勝手に日本海に引いて、漁船や漁民を捕えては賠償金を巻き上げる暴挙を繰り返した挙句、島根県の竹島を占拠する暴挙に出た。その後何十年も経った後に、大阪の在日韓国人出身者の大統領まで出現して、島に異常な肝入れをして軍隊までも上陸させて実質占領している現状をどうするのか。

また、支那（中国）が尖閣列島に巡視船を進出させて領海侵犯したり、漁船を唆してまでも不法な漁をさせて横暴な行為を繰り返し、挙句の果てには根拠もない自国の領土だと主張する。国際法も何もあったものではない。理不尽そのもの

だ。軍備をしっかり整えておればこの様にならないのだが……

恐喝。恫喝とも言える現実に対して反論・反撃できないでいるだらし無い、根性のない独立国は世界中には我が国以外にはないのだと！と私は言いたい。自衛隊は軍隊ではない。装備も数も僅かで貧弱。まるでおもちゃの兵隊である。

民主党政府の某閣僚に言わすれば「暴力集団」と表現された事実は嘆かわしい事である。鳩山・管・野田内閣の失政は罪万死に値する。誰がその責任を取ろうというのか。どうするの？ ここからが、大事な話なのです。

私の町内に住む八十六歳になる女性。旧制高等女学校卒業のオバアチャン。亡妻が親しくしてもらった方で、世話好きで公共心の強い好人物。この方が、先日次の提言をしてくれた。

町内の公園に遊びに来る子供達や、それに付き添ってくる若いママたちを見ていると、「もう世も末だワ」と思う程情けなくなる。何故なら、ゴミは散らかす、片付けはしない、自転車では町内の道路を道一杯に並んで飛ばす等々…、全く躾がなっていない。やりたい放題・言い放し道徳心なしの日本人だワと嘆く。学校教育も悪いが、家庭教育ももっと悪い。特に若いママやパパの家庭教育のなって

いないことに腹がたつ…と。
日本を良く変えるには憲法から変えなけりゃいけんネェ。憲法を変えて教育内容から変えて、十八歳になったら男女共に三年間は自衛隊勤務を義務付ける。自衛隊がいやなら、耕作放棄の農地耕作事業に三年間従事を義務付ける。そうすれば少しは落ち着いて以後の仕事にじっくりと取り組む様になって、産業の発展につながる様に思うがどうでしょうかネと。
文字に書くと実情は表しにくいが。言葉では心が通じる感じがする。

軍隊がなければ戦争もないだろうか。武力がなければ、いまや立ち所に制服されてしまうだろう。イスラム圏のゲリラの現実を見たらどうか。
『自分の身は自分で守る』、これは最低の義務と権利と承知すべきでしょうと、そのオバアチャンの説に同感。
新聞やテレビの解説者たちの言うことは理想や空想であって、共産党の言うことと同じ。どこの国籍人かと疑いたくなるし、奴らの無責任なご意見に腹を立てたり、血圧を上げたりするのは非常に不健康だワ、と嘆いている昨今である。

この際日本も憲法を改めて軍備を整えるために消費税を大幅に増加させて軍

需産業（兵器産業）を活発化させて、外国に蹂躙されないようにシッカリと両足で立っていなければだめだ。日本の歴史を昔に戻すのではなくて新しい日本歴史を組み立てて、曲げられない歴史教育を立ち上げるのが現代日本ではないだろうか？

落ち着いてゆっくりと古事記や日本書紀を参考に真の日本史を立ち上げる可きである。嘘の歴史観を速く払拭すべきである。

私が昭和三十四年四月に航空自衛隊第二十一期幹部候補生になって入隊二ヶ月後に李承晩ラインを潰せと候補生学校で先輩の任官ホヤホヤの幹部や高卒の曹候補生たちと息巻いていた時に、隊長に「君達は自衛隊を潰す気か」と叱られたが、当時の隊長も本心ではなかったと思うし、後年同期会では笑い話になったことから、あの当時はそうすべきだった（止めるべきだった）かと納得もした。新しい日本の軍隊を作るには昔の帝国軍隊ではない民主国家日本の軍隊を作るのだ。暴力集団ではないものを。腑抜けの日本人にだけはさせたくない。

慰安婦問題

大阪市長の橋下さんが言ったことは正しいことだし恥ずべき問題でもない。戦

時中の軍隊には慰安所・慰安婦は付き物なのだ。連合軍にもチャンとあったのだから。映画”ナバロンの要塞”（英国海軍がドイツ軍の要塞を攻める）くだりの女性パルチザンの一人がスパイ容疑がかけられると慰安所送りになると脅え射殺されたシーンがそれを証明している。何も日本軍だけの悪事ではないし、被害者が韓国女性だけではないと私は言いたい。

日本人よもっと自信を持て！　世界をリードする力と能力を持とう！